

鄭和と一帯一路構想

上田信（日本・立教大学）

明代に南洋に遠征したことで知られる鄭和が、第1回目の航海を行ったとされる1405年から600周年となる2005年に、中国政府は出帆したとされる7月11日を「航海の日」に指定した。習近平体制下の中国政府は、「一帯一路」政策、を掲げ、「一路」のシンボルとして、鄭和を顕彰し、航海の日に盛大な行事を行うようになった。しかし、インドネシアでは、海洋強国中国のシンボルと異なる鄭和のイメージが存在する。

インドネシアでは、ポスト・スハルト時代となると、華人系ムスリムが鄭和を記念するモスクが建てる動きが見られるようになった。スラバヤにある Masjid Muhammad Cheng Ho（鄭和清真寺）は、中国風の建築となっている。メダンでは華人系ムスリムが、Tionghoa Al-Ali Cheng Ho という名のモスクを立てるために、資金を募っているところであった。華人系ムスリムは、南洋にイスラームを広めた人物として鄭和を顕彰する。

雲南の滇池のほとりにある鄭和の父の墓の前に、「故馬公墓誌銘」が刻まれた石碑が立っている。その碑文の冒頭には、次のように記されている。

公(鄭和の父)の字は哈只(ハッジ)、姓は馬氏、代々雲南の昆陽州のひとであった。その祖父はバヤン、祖母は馬氏、父(鄭和の祖父)もハッジ、母は温氏であった。

この哈只という字は、すなわちメッカ巡礼を成し遂げたムスリムへの尊称であるハーჯジュである。鄭和の父と祖父は、このハーჯジュとしてムスリムの社会で尊敬を受けていたと考えられる。

15世紀初頭、海上のメッカ巡礼路に、異変が起こる。インド洋海域からマラッカ海峡を経てシナ海域に来ていた船が、14世紀末頃から来なくなる。その原因を明朝が把握したのは、1403年である。

近年、マラッカ海峡以西のムスリムやハッジが、アユタヤに足止めされている¹。

インド洋を船で渡ってきたムスリム商人やメッカ巡礼終えた人々が、マラッカ海峡を通過できないために、ベンガル湾から陸路でアユタヤに入り、中国船が来港するのを待っていたことが判明したのである。

三仏斎を自称したパレンバン王権が姿を消したあと、この港は中国側の文献に旧港と記されるようになる。支配の空隙を突いて旧港に根を下ろしたのが、陳祖義という名の広東出身の海洋商人であった。マジャパヒト王国は陳を後押し、王国が承認しない船舶がマラッカ海峡を通過することを阻止しようとしたと考えられる。ムスリムとして育った鄭和は、中国からメッカへの海上の巡礼ルートの再開するために、主人の永楽帝に働きかけて南海遠征を企画したと、私は推察している。

ジャワ北岸の港町スマランにある三保廟(Klenteng Sampo)で発見された史料に基づいて編まれたとされる『編年史』²は、鄭和が陳祖義の排除後に、新たな秩序を創る過程で、

イスラームを南洋に広げたとする。『編年史』によると、鄭和が陳祖義をパレンバンから排除した理由の一つに、非ムスリム勢力を抑え、ムスリムのコミュニティーを成立させるという目的があったということになる。

スラバヤの「鄭和清真寺」という扁額の下に「MASUJID MUHAMMAD CHENG HOO」とある。ムハンマドとあるのは、雲南の碑文で鄭和の父の姓が、「馬氏」とあるところに由来している。中国では馬という姓を持っている人の多くはムスリムであり、馬というのはムハンマドの音に基づくとさる。

鄭和を記念するモスクを建てるために、インドネシアの華人系ムスリムたちは、財団を組織した。この財団は「インドネシア・イスラム・中華・統一」というモットーを掲げ、さらに「非政治、独立、社会刷新」という3つの行動指針を建てている。その「非政治」の説明では、我々に様々な働きかけがあるかもしれないが、それに対しては常に中立の立場を保つべきだ、とあった。インドネシアと中国という国家権力の狭間で、インドネシアに住んでいる華人ムスリムは、政治的な思惑に左右されないで、バランスを取りながら、中立、非政治を維持していかなければいけないのだという自覚を持っているのである。

いま中国が進める「一路」政策は、中国の国威発揚という色彩が強く、中国のための海洋政策だと世界から見られている。そのシンボルとして鄭和が顕彰されている。しかし、鄭和本人の意図は、ムスリムの海上の巡礼が安全に成し遂げられるような、どの国の住民にとっても、安全に航海できる海の秩序を創ることにあったと、私は考えている。

いまから70年前、インドネシアの石油資源を日本に運ぶために南シナ海域で行った日本帝国の侵略戦争が、多くの犠牲を出して終わった。中国には日本の戦争責任を事実に基づいて論じるとともに、日本の失敗から教訓を学ぶ必要があるだろう。

1 『明実録』永楽元年十月辛亥

2 曾玲主編『東南亜的「鄭和記憶」与文化詮釈』黄山書社、2008年

★参考文献：

上田信『シナ海域蜃気楼王国の興亡』講談社、2013年